

# 厳寒のシベリア —悪夢の抑留生活—

大友 和夫

## 約1か月半の軍隊生活

昭和20年6月、私は樺太青年師範学校の2年生だった。

「大友和夫は、昭和20年6月27日午前10時まで、樺太公立大泊国民学校に集合せよ！」と概略このように書かれた入隊通知書（俗に赤紙といった）を受け取った記憶がある。終戦記念日の約1か月半前、歩兵第三〇六連隊第二機関銃中隊に現役入隊した。

当時（昭和20年）太平洋戦争の戦況についてはあまり知らされていなかったし、知らされたとしても日本軍が有利に戦況を進めていたことが「樺太新聞」に掲載されていたような記憶がある。しかし実態はアメリカ軍によって、フィリピン、沖縄上陸、そして東京の大空襲を受けているときに「本土決戦」とか「竹槍訓練」（物干竿ぐらいの大きさの竹の先を尖らせて人を刺し殺す訓練。2m50cmから3mぐらいの長さ）など「一億総動員」といわれて毎日が追い詰められている気持であった。

このような戦況の最中であつたから戦死者も多く、体のあまり丈夫でない人もつぎつぎと容赦なく入隊させられた。私たち同級生もそれぞれの本籍地によって、本州・北海道・樺太の部隊に入隊した。きょうは1人、あしたは2人と、6月になると学級40名中、15、6人となった。私には或いは「入隊延期」（3年間在学中はこの条件）になったのではないかと憶測をしていたがなんと入隊日の3日程前になって通知がきたので身のまわりの整理で忙しい目にあつたことを記憶している。母親が兄を関東軍に送り、また弟を送るやりきれない気持ちだつたのか人込みのかげになっていたことを思い出すと今でも胸が熱くなる。

海行かば 水漬くかばね 山行かば 草むすかばね

大君の辺にこそ死なめ かえりみはせじ

校庭に並び大声で見送ってもらったが、これで最後の別れになることを予想してみんな悲壮な心境であつた。

樺太公立大泊国民学校に集合し、軍事係より本人の確認やら所持品の検査を受け、それぞれの班の所属が決定されると、大泊から東へ海岸沿いに8kmぐらい歩いた。亜庭（あにわ）湾を一望できる女麗（めれい）に兵舎があり、いよいよここで日本軍人として一步を踏み出すことになった。

歩兵第三〇六連隊は昭和20年3月、日本陸軍が急を告げる日本の現状を考え今様に言えばインスタントの部隊であると言われていた。そう言えば17、8歳の若い人から高年齢の人まで寄せ集めの感じがした。軍旗は御下賜になったばかりだと言うことで真新しいものであつた。ほかの軍旗を見ると「ふち」だけのものもあつたから尚更そう見えた。

つぎの日から毎日毎日女麗の丘陵地帯で鬼畜米英（米国や英国を当時学校教育ではこのように教えた）が上陸することを予想して模擬の戦車に手榴弾を投げ爆破する訓練が続けられた。戦車の走行速度を予測し手榴弾の発火装置を抜いてから何秒ぐらいで投げなければキャタピラの下敷きになって爆破できるか5、6mぐらいまで接近しての訓練だがなかなか命中しない。何回もやり直しをさせられた。

また、重機関銃の標的訓練は100mぐらいの距離であつたが、連続して発射するので手のふ

るえが邪魔になって命中度が悪い。重機関銃は4名1組になって移動したり分解して馬に乗せたりするがあばれ馬にあって苦勞したものである。

8月5日頃、一期の検閲後、毛髪と爪を切って遺品とするよう命令がきたので丁寧に紙に包み班長に渡したときには「いよいよ決戦の日がきたな」と、あの緊張の一瞬が今でも思い出される。

数日後、栄浜（さかえはま）に移動命令がでて警備に当たっていた8月15日、重大放送があるということでラジオ放送に聞き入ったが雑音がひどく、ようやく「忍び難きを偲び 絶え難きを堪え」の一部だけを聞き取ることができた。その晚上官達はどこで酒を飲んだのか日本刀を振りかざしながら「日本はまだ負けないぞ！」と大声を出して意気込んでいたのが印象的であった。この日は樺太は暑い日であった。

4、5日経ったろうか、8月20日前後ソ連軍が北緯50度を越え南下してくるという情報があった。敷香（しきか）方面から南下してくる列車には避難民が無蓋車に寄り添いながら「兵隊さん頼むよ」と大泊方面に行くのを見送ったがなんともやりきれない気持ちだった。それから久春内（くしゅんない）まで夜を徹しての強行軍であった。疲れて眠りながら行軍した記憶がある。よもぎ、つるくさなどで充分偽装し夜間の戦闘に入った。無気味な銃声がヒューン、ヒューンと耳をかすめる。かなりの距離をとっての交戦のようである。「おれは絶対死なないぞ…」という意識の強く働く約2時間近くの交戦のようであった。退却命令がでた。ホッとした。身も心も疲れ果てていたから、宝沢（たからさわ）まで退却、深夜だった。お寺を借り仮眠のひとときを過ごした。

## 樺太抑留・そしてシベリア抑留\*1

落合（おちあい）まで退却した8月24日、5日頃かと思うが、日本軍将校とソ連軍将校との立会いのもとで「武装解除」がおこなわれた。銃、短剣などが広場に並べられ員数を数えていた。我々兵隊も数えられこれ以後はソ連軍の監視のもとに銃剣を突きつけられ、樺太公立落合第一国民学校に監禁されることになった。「神州不滅」を信じて軍事教練に励み、軍人勅諭をよく体得し、質実剛健な一軍人と自負していたがあの「武装解除」時ほど体の力を抜き取られるように感じたことはない。

9月中旬頃から10数名ずつの班になって作業に出された。裏山の白樺林で枝を切り落とし束にする作業である。これは馬の飼料にするのだということで1か月ぐらい続いたろうか。樺太各地でソ連軍と戦闘があったので、ほかの人たちも戦場の整理や死体の処理作業に当たったのである。

昭和20年10月下旬、樺太庁大泊高等女学校に集結させられ、ここで何日か着の身着のまままで過ごした。北千島を守備していたという日本兵士と合流し乗船が始まった。5列に並ばせて数えるのだが途中で間違えて何回もやり直すと業を煮やした日本人が、「馬鹿野郎！」と一喝する場面が何回もあった。ソ連軍の油輸送船に7千人乗船したと当時の上官から聞いたが甲板の上では身動きできないくらいであった。「ヤポンスキー、ダモイ、ダモイ」（日本人帰る、帰る）と監視のソ連兵が言うのでみんなは稚内か小樽だ、いや函館に上陸するだろうなどと喜んで話し合っていた。しかしどうもおかしい。能登呂半島の先端までくると旋回し北上しはじめた。旋回しながら日本に帰るのだろうとぐらいに思っていた。その夜は海上で一泊。この当時は機雷の浮遊で夜間航海はできないとのこと。今考えると全くゾッとする話で

ある。船上は寒い。甲板の上で背のう\*2を枕に外とうをかぶって横になったが眠れない。3食とも缶詰1個ずつの食事だから腹具合が悪くみんな下痢をしている。甲板の上からの大小便のタレ流しだから手すりにしっかりつかまって潮風の吹き上げない合間を見て事をするのだが横になっているとずいぶん顔にかかるが、お互い様だからだれも文句を言わない。

\* \* \* \* \*

外国の港であると直感した。ダモイ、ダモイとやっぱりだまされた。心細かった。恵須取(えすとる)の真向いにある「ポートワニ」という港である。ドイツ人捕虜が作業をしていた。「同病相哀れむ」か、言葉は通じないがニコニコしながら手を振って迎えてくれたことが親近感として印象に残っている。飯盒のふたに食事が配給になった。えん麦飯である。家畜並の待遇である。一口ずつ「カラ」を吐きだしながら食べた。

港から4kmぐらい歩いたろうか、途中の道は凍っていて馬車の轍(わだち)のあとが踏んでもくずれない。あたりの木々は全部葉が落ちて草も枯れていた。10月下旬シベリアは寒かった。夕方、強制収容所に着いた。カンテラひとつと白樺の皮を燃やしながらの食事の配給である。みんな薄明りのなかで目だけが光って食事当番の手もとを見ている。黒パンは、すっぱくてなかなか食べられなかったがみんながまんして食べた。

ドイツ人捕虜が作った収容所に入ったが、まだ土壁が塗っていないので丸太の間にツンドラをつめ込んで壁を塗る作業が始まった。ツンドラ地帯だから壁の土がない。遠くまで一人ひとり袋に入れて運ぶ。11月になって氷点下のなかで壁塗り、ドラム缶で湯をわかしてこねての作業は重労働であった。

いよいよ初めての伐採作業である。から松がほとんどで実によく伸びている。12尺ずつに切るのだが4、5本とれる木ばかりである。2人で向かい合って切るのだが調子を合わせて引かないとうまく切れない。この伐採作業はシベリアに抑留された日本人捕虜の大多数が経験した労働である。休憩時間は半ばになった丸太や枝などを燃やしてふるさとのごちそうの話をしたり、いつ帰れるのかとか毎日そんな話をしたものである。ソ連兵の監視が付きっきりで少し休みながら作業などをすると「ニハラショー ラポーター ブイストラ ブイストラ (作業不良者 早く 早く)」と銃剣を突き付けどなりちらされながらの作業はとても辛かった。

捕虜になって翌年4月頃ようやく風呂に入れるようになった。八升樽を半分に切った大きさの入れ物に2杯ずつの割り当ての湯で体を洗わなければならない。日本人捕虜の要望で3、4人入れる浴槽ができたがなかなか順番がこない。日本を離れて半年ぶりの入浴だから垢がでるでる。衣類は虱(しらみ)がまん延しているので炭窯のようなところに個人毎に針金の輪につるして入れ入浴が終わるまでに滅菌するという方法であった。

沿海州地方も7、8月頃になると裸で作業するくらい暑くなることがある。昼休みは襦袢や股下の虱取りで一時夢中になる。そこでこれらを飯盒に入れ煮沸するのである。これは効果的であるが、2、3日するとまたもとどおりになる。

作業の合間に浜辺へでて昆布など海藻を拾って食べた。空腹だったからずいぶん足しになった。あたりを見ると戦車がある。近寄って見ると板で巧妙に作られている。日本の模擬戦車の倍ぐらいの大きさである。また、浜辺には直径30cmぐらいの丸太の先を鉛筆のように削って海に向かって30度ぐらいの傾きで何本も埋めてある。敵の上陸を予想してだろうが、

これなら敵の上陸用舟艇も逆戻りするだろうと思った。

ポートワニとかソフガワニは、樺太の恵須取の真向いぐらいで天気の良い日は樺太が見えたから望郷の念にかられたものである。

両地で5か所ぐらいの収容所を移動して作業したが、昭和21年9月上旬ごろ北に向かって移動が始まった。アムール川をポンポン蒸気船で渡ったが船べりまで水がヒタヒタとくるのでいまにも沈没しそうで心細かった。移動の列車は貨物列車で馬糞の臭いがひどい。時折停車しては薪を積んで燃料にして走っている。今思うとシベリア第二鉄道の建設中だったのかも知れない。大きくゆれながら走っていたのを覚えている。10数日間で何地方か判らないが噂によるとヤクーツクだろうと言われていた。山の中に収容所があった。

翌日から作業に出された。うら若い女囚の一団と会った。どのような罪状でこのシベリア流刑地まで来たのか知る由もないが広大なキャベツ畑、ジャガイモ畑でみな陽気に歌を歌いながら取入れ作業に精を出していた。

伐採作業と平行してソ連式建築の住宅建設である。丸太を横にして積み重ねていく方法であるが、どうしても透き間ができる。この透き間をなくすために八番線ぐらいの針金を火ばさみのような形にして先を少し曲げてとがらしたものを俗に「バカ」と言っていた。これで積み重ねた丸太を両側から傷をつけて引いていく。ここを斧で削って落とす丸太はピタリと合うのである。

この地方は南京虫が多く虱と違う痒みである。つぶすと独特な油臭い息づまるような臭いがする。吸血で丸くなった南京虫は夜明けころにはすでにすき間にかくれてします。昼の労働で熟睡しかけているが、虱と南京虫で何回も起こされる。熱湯をベッドの上からすき間をめがけてかけるのが作業に行く前の日課になっていた。

\* \* \* \* \*

昭和21年12月頃、北に向かって移動が始まった。こんどはトラックでの移動だから寒かった。1台に35、6人乗ったろうか、しばれたガタガタ道を容赦なくスピードを出すものだから瘦せた尻の骨が弾んで頭にひびく。聞けばベルホヤンスクの近くだという。この北限の流刑地までくると体も弱ってきたし思考力もない。ここでも伐採作業と平行して収容所作りが始まった。山で概略組み立てて平地にトラックで運んで正式に組み立てるのである。これにツンドラを丸太の間にはさんで壁を塗るのだがこの作業も重労働だった。

この地方は零下50度にもなる。この時は作業はない。ドラム缶式ペーチカにどんどん薪を焚いてジッと収容所の中にいるだけである。図書もない、鉛筆もない、紙もない、なんとも言われぬ静けさである。しかし午前10時頃になると零下40度以上になると作業に出される。凍傷を防ぐ軟こうを顔とくに鼻の頭と指先に塗っていくがそれでも凍傷にかかる。寒さと栄養失調で死ぬ人がでてきた。朝起きてみるとそのまま息を引き取っている人もいる。日本人捕虜のお坊さんがお経を上げて送るが我々にはどうすることもできない。毛布にくるまれてトラックに無造作に積まれどこに葬られたか知る由もない。

どうも寒けがする。熱が40度近くある。軍医から休養するようにと米の粥をもらって3、4日休養するうちに体の調子よくなって食欲も進んできた。班長が「働かないで食べている」と言ってビンタを5、6回もらった。体の調子が良くなってきたのだと弁解しても聞き入れようとしな。日本軍下士官の横暴（みんなではないが）である。思いやりのない日本軍の階

級制をシベリアまで持ち込んだ一場面を思い出す時がある。

北極海に流れる川は冬凍って止まるのにはびっくりした。その氷をとかして炊事や入浴に使うのだから水は貴重なものである。ソ連の兵士はコップ1杯の水で口をゴロゴロとすすぐ。その水を手のひらに受けて顔をお洗うのである。我々捕虜もこの方式で3年間過ごしたが300人いる収容所で洗顔用として石油缶5杯分ぐらいしか配給にならないから最後の方になると水がなくなる。その時は1日洗わないでそのままということになる。

冬は川が交通路になり大型トラックがたまにくる。捕虜の食糧を運搬するのが主であるが南京袋を満載している。積荷を下ろしたあとへ行ってみると大豆や高粱（コーリャン）などがこぼれている。みんなで拾って食べたのも余命をのばした一因かもしれない。

便所は収容所の一番奥手の方に四方をむしろで囲ってある。便槽は長さ10m、幅3m、深さ2mぐらいある。直径20cmぐらいの丸太を二つ割りにしたものを架け渡して。300人もの人達の便所だから朝はずいぶん混雑する。お互い隣同士で前向き、後向きで雀が電線に群れたときのようなのである。零下40度から50度ぐらいになるのだから催しが充分になってから短時間でしないと露出部分が凍傷にかかって以後使いものにならなくなるのでみんなで注意し合ったものである。毎日各宿舎から3名ぐらい便所掃除に出される。この掃除は大小便が積み重なるのでこれを2mぐらいの先のとがった鉄棒を振り上げ力いっぱい突き刺すのだが突き刺さらないではね返る。こうして根気よく崩す。火花が散るように口や目に入る。衣服やポケットに入る。この塊を収容所の外に投げ捨てるのである。

医師の診断が定期的にある。でん部の肉のつき具合で、一級重労働・二級労働・三級軽労働・四級保養と分けられる。これまで気力で頑張ってきたが四級に診断された。作業に行くにもようやく歩いていたほどだったから完全な栄養失調になっていた。

\* \* \* \* \*

昭和22年5月頃、コムソモルスクの近らしいところに移動した。シベリア各地から集まった栄養失調者は500名近くも収容された。毎朝ラジオ体操をして食後は睡眠時間である。入浴は1週間に2日である。床屋さん（日本人）もいてきれいに丸坊主にしてくれた。ときどき入浴時にカミソリを持ってわき毛と陰毛をすり落とされる。虱がつくからだという。

少しずつ体の調子がよくなって夏ごろからたまたま軽作業に出されることになった。作業の合い間に、オオバコ・ハコベ・イラグサなど飯盒で煮て食べた。空腹だったから蛙など皮をむいて焼いて食べたりしたが淡白な味がして当時はみんな好んで食べた。

食事は悪い。1食あたり黒パン250g、高粱粥茶碗1杯ぐらい、スープは飯盒の蓋で半分ぐらい、だいたい常時これが普通食でそのほか塩鯿（しおにしん）がでるぐらいである。大豆の煮た物を1日3回1週間食べさせられたことがあるが、視力がなくなり足がむくむようなだるいようなことがあったが偏食は恐ろしい。

から松の葉を刻んで水で2、3日浸したものを毎日コップ1杯食後に飲まされたが甘ずっぱい松ヤニの臭いがしたが健康保持のためだと思って飲んだものである。

栄養失調になってから小便が近くなり夜7、8回も起きる。スープに湯を足して少しでも満腹感を味わおうとして食べたせいもあるが、催してから走って便所まで行くのだが我慢しきれず粗相するようになった。衰弱したという実感がした。

昭和22年10月末、夏物衣服と防寒服の交換があった。「一生帰れないのだ。」などと言う

者、殺伐な動作をする者、すっかり滅入ってしまう者、収容所という隔離された社会にいると追いつめられて動揺する気持ちになる。

昭和23年6月はじめ頃になると「ヤポンスキー ダモイ」と監視のソ連兵が頻繁に言い出した。別の作業班から「確かに汽車に乗って南下している。」といううわさが収容所のなかで言われた。帰国は事実のようだ。貨物列車に乗せられた。まったく閉め切りなので夜行列車のようなものである。半日ぐらい走り続けて止まる。3日目にハバロフスクに着いた。全員下車して外の空気を吸った。町の方を見ると平屋建ての白い家が立ち並んでいたのが印象に残っている。2千名乗車していると聞いている。列車を数えてみると50台ぐらい連結していたような記憶がある。2日かかってナオトカに着いた。

昭和23年6月30日、乗船命令が出た。本当のダモイだ、みんな抱き合って喜んだ、日本に帰れる。親兄弟の顔が目に浮かぶ、3年間の重労働、骨身を削って屈従に耐えた日々だった。

### ようやく終わった捕虜生活

栄豊丸に1500名乗船したという。まだ残された戦友らが収容所で手を振っている。「早く帰って来いよ。」「元気でな…。」大きな声で別れを惜しんだ。交互に甲板に出てなつかしいふる里の話に花を咲かせている。3日2晩で戦前の軍港舞鶴港に入港した。深い入江でさすが海軍の根拠地を思わせる地形を選んだものだと感じた。また、両側の松と竹の緑の美しさは今でも忘れられない。日本は美しい。あの情景が今でも思い出される。

昭和23年7月3日、ようやく約3年間の捕虜生活が終った。引揚者援護局のあたたかいおもてなしを受けた。畳の上での赤飯・味噌汁・焼き魚でそしてゆっくりした風呂、なんともいわれぬ日本の味をゆっくりかみしめた1日であった。復員手続きを済ませ手当2千円と上下服と靴それに下着類を取り替えて貰った。全部旧軍隊のものであった。それぞれ方面別に帰郷列車に乗り健闘を誓い合って別れた。

(おおとも かずお 大正13年生まれ)

**\*1 シベリア抑留** 敗戦後「軍事捕虜」の名目で約60万人の日本人が旧ソ連に抑留された。抑留されたのは、関東軍や千島部隊の将兵だけではなく、満蒙開拓団としてソ連国境近くに入賞していた農民、満州国の官吏、満鉄（南満州鉄道）や満業（満州重工業開発株）などの国策会社の職員、それに従軍看護婦や軍関係の婦女子まで含まれていた。

抑留のため集結させられた日本人は、約千人を単位とする「作業大隊」に編成され、ソ連各地の収容所へ連行され、軍事捕虜としての強制労働を課せられた。

収容所の数は、分遣隊の作業場などを含めると、約1,800か所とも2,000か所ともいわれている。

**\*2 背のう（背囊）** 学生や軍人などが物品を入れて背に負う方形のカバンで、革またはズックでつくったもの。